

## 論 説

## 近世ヨーロッパの人口動態 (1500~1800年)

高 木 正 道

## I 人口動態の旧体制

一般にある国ないし社会の「人口様式」(Bevölkerungsweise)は、歴史的にみると、高出生率・高死亡率(多産多死)の第一局面から、高出生率・低死亡率(多産少死)の第二局面を経て、低出生率・低死亡率(少産少死)の第三局面に移行する。「人口転換」(demographic transition)と呼ばれるこの歴史的過程をヨーロッパについて粗描すれば、次のようになる。すなわち、人口転換以前の時代においては出生率と死亡率はともに高い水準(約30%)にあったが、18世紀の後半以降死亡率が下がりはじめ、その結果としてかなり急激な人口増加(「人口爆発」と呼ぶ学者もいる)が生じた。しかし19世紀後半になって産児制限が普及しはじめると、出生率が低下し、少産少死(出生率・死亡率ともに15%前後)の人口様式に移行した。大抵のヨーロッパ諸国では、この移行が完結するまでにほぼ200年を要した(図1を参照)。

本稿が問題にする近世(Frühe Neuzeit)は人口転換が起こる以前の時代であるから、その人口様式は多産多死によって特徴づけられた。当時のヨーロッパはまだ人口が全体としてきわめて少なく、都市や村落の規模も非常に小さかった。人口はほとんど増加しなかったし、増加したとしてもほんのわずかであった。だがその原因は、低い出生率ではなく高い死亡率にあった。フェルナン・ブローデルが言うように、ヨーロッパ社会は1740年頃にやっと人口動態の旧体制から脱却しはじめるのであるが、この人口動態の旧体制を構成していたのは「生と死との対等、非常に高い幼児死亡率、飢饉、慢性栄養不良、強烈な流行病」であった(ブローデル『物質文明・経済・資本主義』I-1、108ページ)。

長期的な観点から見て、旧体制下の人口動態を特徴づけていたのは、「一に近い世代の再生産

率」をもつ「脆い均衡」であった。そこでは、「幸福な数年間と苛酷な数年間との継起にもかかわらず、地域的・局地的・社会的偏差を貫いて、全体として一種の内的均衡というべきものが実現されていた」が、世代の再生産率の決定に与った諸要因の一つが変化すれば、それによってこの率はどちらか一方の方向へ決定的に傾きかねなかったので、その均衡はまことに脆いものであった。人口動態の旧体制のもう一つの特徴は、「人口現象の年ごとの推移が本質的に不規則であること、つまり、出生数、死亡数、そして婚姻数さえもが、年を逐って、しばしば大きな偏差を示すということ」であった。この現象は「あまりにも持続的かつ執拗に、どの小教区においても、どの地方においても、どの時期においても現われるので」、それは旧体制における人口動態構造そのものの本質的特徴とみなすことができる（グベール『歴史人口学序説』34～36ページ）。

当時の平均寿命（出生児の平均余命）は、今日と比較してかなり短かった。グベールは先に引用した箇所、1661年頃のフランスにおける平均寿命を25歳以下と述べているが、16世紀末のヘッセン北部のシュヴァルム（Schwalm）では平均寿命はおよそ25歳と30歳のあいだにあった（Borscheid, *Geschichte des Alters*, S. 26）。「1690年代の平均寿命は、イギリスでは32年、ドイツのプレスラウでは27.5年であった」（ギリス『〈若者〉の社会史』18ページ）。エンゲルジングによれば、18世紀末のプレスラウにおける平均寿命は33歳から34歳であった（Engelsing, *Sozial- und Wirtschaftsgeschichte Deutschlands*, S. 101）。ドイツとオーストリアにおいては、19世紀の半ば過ぎになってもこうした状況は基本的にあまり変わっていなかった（表1）。

近世に生きた人々にとって60歳をこえることができれば、まさに御の字といえた。60歳をこえて生きている者は当時の村や町できわめて稀な存在であった。ちなみに、宗教改革と宗教戦争の時代にハプスブルク家から出た皇帝たちの多くも、実に興味深いことに、60歳ないしはその前後でみまかっている。マクシミリアン1世（1519年没）は60歳、カール5世（1558年没）は58歳、彼の弟フェルディナント1世（1564年没）は61歳、マクシミリアン2世（1576年没）は49歳、ルードルフ2世（1612年没）は60歳、マティアス（1619年没）は62歳、フェルディナント2世（1637年没）は59歳、フェルディナント3世（1657年没）は49歳であった（Borscheid, *Geschichte des Alters*, S. 24）。

ところで、フリードリヒ・エンゲルスは、産業革命期のイギリスにおいて平均寿命が階級ないし階層によってかなり異なっている事実に注目している。「リヴァプールでは1840年に、上流階級（ジェントリ、専門職等）の平均寿命は35歳、商人と富裕な手工業者の平均寿命は22歳、労働者、日雇い労務者、奉公人階級の平均寿命はなんとわずか15歳であった」（エンゲルス『イギリスにおける労働者階級の状態』（上）岩波文庫、210ページ）。しかし、このような「死のまえの

社会的不平等」(inégalité sociale devant la mort)は、決して産業革命とともに始まったわけではなく、すでにそれ以前の近世にも存在していた。この問題に関しては、17世紀のジュネーヴについて詳しい研究がなされている。それによれば、上層(大中のブルジョワジーや上級公務員)の場合、60歳に達した者が1000人中305人いた。これにたいして中層(小市民、手工業者、熟練労働者)においては171人、下層(不熟練労働者や下働きの労働者)ではたった106人にすぎなかった。この相違はある程度まで、階層によって異なる乳児死亡率に起因していた。実際、1000人の乳児のうち、満1歳の誕生日を迎えることができた者は、上層では792人、中層では697人、下層では642人だった。だが、それだけではなかった。死の危険は、どの年齢をとっていても上層よりも下層において大きく、50歳の平均余命は後者のほうが前者よりも5歳、60歳のそれは2.3歳短かった(Borscheid, *Geschichte des Alters*, S. 26, 246 f; 図2)。

平均寿命がこのように短かった原因は、乳幼児と子供の高い死亡率にある(表2)。17世紀後半の6年間にフィレンツェのある教区で死んだ1000人の教区民を年齢別のグループに分けてみると、710人が乳幼児と10歳以下の子供であり、その半数以上(367人)が1歳未満の乳児であった(*The Fontana Economic History of Europe*, Bd. 2, S. 69)。カルロ・チポラによれば、正確で包括的なデータを集めることができる場合、われわれは次のような結果を得る。すなわち、工業化以前のヨーロッパでは、生まれた子供1000人のうち、150から300人が1歳未満で死亡し、もう100から200人が10歳に達するまえに亡くなった(Cipolla, *Before the Industrial Revolution*, S. 156)。グベールも、「恵まれたオヌーユにおいてさえ、新生児の四分の一以上は1歳未満で死亡したのであり、彼らの半分よりやや多くの者は20歳の誕生日を迎えることができなかったのである」(グベール『歴史人口学序説』26ページ)、と述べている。

図3は、A. E. イムホーフが、ベルリンのドロテーンシュタット教区における1715~1875年のすべての死亡例39251件をコンピュータ・グラフィックで描いたものである。横軸は年で、左から右に向かって1715年から1875年までを表し、縦軸は死亡年齢で、手前に向かって0歳から90歳までを示している。そして、この教区での死亡例ひとつひとつがその死亡年と死亡年齢にしたがって小さな箱として描かれている。同じ年に同じ年齢で多くの人が死ねば、たくさんの箱が積み重なって柱になる。毎年同じ年齢で多数の人が死ねば、柱が横に連なって壁ができる。生まれて間もない年齢層のところには巨大な「死の壁」が聳え立っているが、この壁をつくっている死者のうち、31.1%(12193件)が1歳未満の乳児であり、かれらを含む50.6%(19857件)が8歳までに命を落とした子供たちであった。ちなみに、その死因の第一位は天然痘であった。ベルリンでは種痘が1801年に導入され、それによって天然痘による乳幼児の死亡は劇的に減少するが、今度は

天然痘に代わって「胃腸系」の病気（便秘、下痢、胃痙攣、下腹部炎症など）が幼い子供たちの命を奪い続けた（Imhof, *Die verlorenen Welten*, S. 203 f）。

フランドランによれば、「1000人のうち200人から300人の子供が1歳になる前に死亡し、20歳まで生き残るのはしばしば半分以下であった」（フランドラン『フランスの家族』78ページ）。ピエール・グベールも、ルイ14世時代のフランスの人口動態を次のように描いている。「1969年の平均寿命は70歳を少しこえている。1661年のそれはおそらく25歳以下であった。この冷酷な数字が示しているように、当時は、ちょうど墓地が村の中心にあったように、死は生活の中心に位置していた。新生児100人のうち、25人は満1歳になるまえに死亡し、もう25人は20歳に達せず亡くなり、さらにもう25人は20歳と45歳のあいだで死んだ。60歳代にまで生きたのは10人ほどにすぎなかった。80歳まで生きぬいた人は、少なくとも100歳に見させる伝説の雰囲気にも包まれており、自然の感情から王者たち（champions）に与えられる迷信的な畏敬の念をもって眺められた。かれの息子や娘、甥や姪はとっくの昔に死んでいた。孫たちのように半分は亡くなったあとも生き続け、この故老は村全体の賢者となった。かれの死は地域全体の大事件であった」（Goubert, *Louis XIV and Twenty Million Frenchmen*, S. 21）。確かに昔も長生きする者はきわめて少数ではあるがいて、まさにそれゆえに特別の存在とみなされたのである。しかし大数法則としては、生まれた者のほぼ半数が20歳以前に亡くなり、60歳をこえる者はせいぜい数パーセントにすぎなかった。

こうした当時の死亡パターンを今日のそれと比較してみると、図4のようになる。現代のドイツでは、乳幼児の死亡はきわめて稀になり、死が多数の人々を襲うようになるのは60歳を過ぎてからである。これにたいして、17世紀後半から18世紀のヴェルテンベルクのニルティンゲン（Nürtingen）においては、この世に生まれてきた者の約35%が1歳未満で死に、約55%が5歳未満でなくなった。そして死は、統計的にみると、人々のそれ以後の人生全体にほぼ平均してばらまかれていた。これに関連して夫婦の死について触れておくと、「結婚初期の数年間には、婚姻関係の断絶は、とりわけ新妻の死亡によって、すなわち結婚当初の2年間……に非常に頻繁に見られた彼女たちの出産時の死亡によって、もたらされた。結婚後10年目から24年目にかけては、婚姻関係の断絶はむしろ夫の死亡によってもたらされる」（グベール『歴史人口学序説』22ページ）。以上のような死亡パターンに対応して、近世ヨーロッパ社会の年齢別人口構造は、いわゆるピラミッド型と呼ばれる形を示している。それは、（1）人口全体に占める15歳未満の年齢集団の比率が高いこと、および（2）人口全体に占める60歳ないし65歳以上の年齢集団の比率が低いことによって特徴づけられる（図3、表3）。

人口転換以前のヨーロッパは現代に比べて確かに多産な社会であった。だがそれは、決して当時の大多数の人々が若くして結婚したことを意味するわけではない。同時代の他の諸社会ないし諸文化と比較してみると、旧ヨーロッパ社会の結婚パターンを特徴づけていたのは、(1) 相対的に高い独身者の比率と(2) 相対的に高い結婚年齢であった。独身者の比率は少なくとも5%、多くのところでは20%から25%に達した (Gottlieb, *The Family in the Western World*, S. 50)。これらの独身者の中核を成したのは、ピーター・ラスレットのいう「ライフサイクル奉公人」(life-cycle servant) である。およそ12~30歳の年齢にあるこれらの男女は、結婚に必要な資金を貯めるために、かれらの青年期を奉公人 (Gesinde) として通常は他人の世帯で暮らした。かれらのうちの大多数が最終的には結婚したが、この時代には常にかかなりの数の独身の奉公人が、農村では下男 (Knecht) や下女 (Magd) として、都市では徒弟 (Lehrling) や職人 (Geselle)、あるいはさまざまな種類の女中として、種々の分野で働いていた。都市には農村よりもはるかに多くの女性の独身者がおり、彼女たちのなかには結婚することなく生涯を終える者も少なからずいた。

旧ヨーロッパ社会においては、貴族の娘は別として、庶民の男女のあいだではむしろ晩婚が普通であり、特に女性の高い結婚年齢は人口動態の旧体制下における「受胎調節のための真の武器」(Chaunu, *Europäische Kultur im Zeitalter des Barock*, 266) であった。16世紀末から18世紀末までのイギリスの教区を対象としたサンプル調査によると、20~24歳の年齢集団に占める既婚者の割合は、男で16%、女で18%にすぎなかった。25~29歳の年齢集団についてみると、対応する数値はそれぞれ45%と50%であった。また17・18世紀のオーストリアでは、20~24歳の年齢集団に占める既婚者の比率は、男の場合は10%以下の地域が大部分で、女の場合は少数の例外を除いてほとんどの地域で20%を下回っていた。17・18世紀のイギリスにおける平均初婚年齢については、男26~28歳強、女24~27歳弱という数値が示されている。同様に18世紀のドイツにおける男の平均初婚年齢は約28歳、女のそれは25歳ないし26歳であった (表4)。

出産に関しては、階層によってかなりの相違が見られ、上層では農民や手工業者よりも出産間隔が短かった。上層の人々のあいだでは、子供を育てるのに乳母を雇うのが普通で、母親がみずから母乳を与えることをしなかったため、出産間隔が短くなったのである。だから、支配層の家族の情景 (例えば、たくさんの子供たちに囲まれたマリア・テレジア) を描いた絵画から、当時の一般庶民の家族生活を類推するのは、まったくの誤りである。農村住民と都市の中層・下層の人々の場合、子供が毎年ひとりずつ増えるということはまずありえなかった。母乳を与えている期間、流産や死産、宗教的戒律による定期的な性的禁欲、ときには長期にわたる夫の不在

—これらはすべて、出産間隔を広げる要因としてはたらいだ。

庶民の出産力についてグベールは、ボーヴェ地方の教区記録簿の綿密な調査から得られた結果に基づいて次のように述べている。「人口動態上のアンシャン・レジームに属する女性はみんな毎年出産したということが、しばしば通例として認められてきたのであるが、これは並はずれた出産力に関するいくつかの断片的な言及に基づいた単なる伝説にすぎない。近代以前のわがボーヴェ地方において（近代以前のわがフランスにおいて、と言える日も近いだろう）、妻たちは2年に一度しか子供を生まなかったし、30カ月に一度というのも多かったのである」（グベール『歴史人口学序説』18ページ）。そして既述のような比較的高い結婚年齢に条件づけられて、たとえ生殖能力を最後まで発揮できたとしても、一人の主婦が生んだ子供の数は、平均値でも最頻値でも、多くて8人というのが実状であった。しかし実際には、妻の受胎可能期間が終わる以前に、夫婦の一方の死によって多数の結婚生活が終止したため、出生の実数はさらに小さくなり、一家族あたり平均出生人数5という値が現実の状態に合致するという（グベール『歴史人口学序説』19-20ページ）。

ところで、人口の流出入がまったくないとすれば、ある地域の人口数の変動は出生と死亡によって決定される。当時、出生率は大体において35%と45%とのあいだにあった。25%と35%のあいだの比率であることも珍しくはなかった。出生率は一般に農村のほうが都市よりも高かった。というのは、人口全体に占める若い夫婦の比率が都市よりも農村において大きかったからである（*The Fontana Economic History*, Bd. 2, S. 66）。

もう一方の死亡率であるが、これは出生率に比べてその変動幅が非常に大きかった。それゆえわれわれは、チポラにならって、死亡率を「通常の死亡率」（normal mortality）と「壊滅的な死亡率」（catastrophic mortality）を便宜上区別して考えるのがよい（Cipolla, *Before the Industrial Revolution*, S. 5）。「通常の死亡率」は特別なことがなにも起こらない平常時の死亡率を意味し、「壊滅的な死亡率」は激しい人口減少をもたらす大惨事が発生したときの破局的な死亡率を意味する。通常の死亡率は農村と都市では若干の相違が見られ、農村では25%と35%とのあいだに、都市では30%と40%のあいだにあった。したがって、大惨事が起こらない時期には、農村人口はわずかではあるが増加した。だがこのわずかな増加分は、ほとんどすべて都市への移住や植民によって吸収されてしまい、それ以上の人口増加につながることは稀であった。

## II 戦争、飢饉、疫病

大惨事が起きたときには死亡率は異常な高さに達し、通常の5倍、10倍、ときには15倍にもものぼった。そして、異常な「大量死亡が襲わないままに10年が過ぎることはめったになかった」(グベール『歴史人口学序説』38ページ)。戦争、飢饉、疫病が、そのような「壊滅的な死亡率」を生じさせる三大災禍であった。だから、当時の人々がくりかえし唱えた祈りは、「主よ、われらを戦争と飢饉と疫病から守り給え」(a bello, fame, et peste libera nos Domine)であった(Kamen, *European Society*, S. 33)。特に戦争は諸悪の根源であった。なぜなら、戦争はいわば不可避免的に他の二つの悪を伴ったからである。すなわち、戦乱による破壊と荒廃はしばしば飢饉の元凶になったし、不衛生な軍隊は動きまわるとに疫病をまき散らしたからである。そして飢饉は、間接的に疫病の流行を助長することによって、死者の数をさらに増やした。というのは、飢饉のときには、貧しい人々は、栄養失調のために病気に感染しやすいと同時に抵抗力も弱くなっており、しかもそのような折りに、飢餓と空腹に堪えかねて、普段は摂取したこともないようなものを食べたり飲んだりして病気になり、命を落とすことがよくあったからである。現実の死者の数という点からいえば、直接の戦闘による犠牲者よりも、戦争の間接的結果としての飢饉の発生と疫病の蔓延による犠牲者のほうが、一般的にはずっと多かった。

大量の人口減少のあと、人口は概して驚くべき速さで回復された。これまで研究された多くの地域や市町村の人口統計が示すところによれば、戦闘や包囲攻撃や疫病のあと、最初の収穫がなされて飢饉が和らぐと、まず著しい結婚の増加が起り、一定のタイム・ラグをとまって出生の増加が続き、こうして大量死によってつくりだされたギャップは埋め合わされた。全体として改善された生活環境と特に人口増加と食糧供給との一時的な緊張緩和が、そうした速やかな人口回復をひき起こしたのである。またこのような人口の回復は、当該地域の住民の出生率の上昇だけによって実現されたのではなかった。まだあまり研究が進んでいない問題ではあるが、人口移動の効果を考慮する必要がある。戦争による生命の危険がさし迫ったような場合、人々は一旦はどこか余所に逃げるが、生存者たちは再び戻ってくる。と同時に、大抵は人口が相対的に過剰になった地域から移民がやって来て定住するようになる。特に17世紀には、大きな人口減少の生じた地域への移住はときどき重要な意味をもった。例えばバーデンの Singen 村では、1650年から1675年のあいだに行われた結婚の半分において、新郎と新婦の両者またはいずれかが同村以外の出身者であった。そのなかでも最も多かったのはスイスからの移住者であった(*Germany*, Bd. 2 S. 239)。

## 戦争

「19世紀は、西ヨーロッパ文明に前代未聞の現象、すなわち平和の100年（1815～1914年）を生みだした。クリミア戦争——これは多かれ少なかれ植民地での事件にすぎない——を別にすれば、イギリス、フランス、プロイセン、オーストリア、イタリア、ロシア相互間では、わずか18カ月しか戦争が起こらなかった。これに先立つ二世紀について対応する数字をみると、一世紀平均60ないし70年の大戦争があることがわかる」（ポラニー『大転換』6ページ）。1500年から1815年までに起こった主要な戦争（内乱・革命などを含む）を挙げれば、次のようになる。

- 1521～1544年 イタリア戦争
- 1524～1525年 ドイツ農民戦争
- 1546～1547年 シュマルカルデン戦争
- 1562～1598年 ユグノー戦争（フランスの内乱）
- 1568～1648年 オランダ独立戦争（八十年戦争）
- 1618～1648年 三十年戦争
- 1642～1649年 清教徒革命
- 1648～1653年 フロンドの乱
- 1652～1654年 第一次英蘭戦争
- 1655～1660年 スウェーデン・ポーランド戦争
- 1664～1667年 第二次英蘭戦争
- 1667～1668年 フランドル（遺産帰属）戦争
- 1672～1674年 第三次英蘭戦争
- 1672～1678年 オランダ戦争
- 1675～1679年 スウェーデン・ブランデンブルク戦争
- 1688～1697年 アウクスブルク（プファルツ）戦争
- 1690～1697年 ウィリアム王戦争
- 1700～1721年 北方戦争
- 1701～1714年 スペイン継承戦争
- 1733～1738年 ポーランド継承戦争
- 1740～1748年 オーストリア継承戦争
- 1740～1742年 第一次シュレージエン戦争
- 1744～1745年 第二次シュレージエン戦争

1756~1763年 七年（第三次シュレージエン）戦争

1776~1783年 アメリカ独立戦争

1778~1779年 バイエルン継承戦争

1789~1795年 フランス革命

1799~1815年 ナポレオン戦争

特に17世紀は戦争に明け暮れた100年であった。「17世紀の100年間、ヨーロッパに戦火の消えた年はたったの4年だけであったといわれる」（高澤紀恵『主権国家体制の成立』41ページ）。あるいはまた、「1618年から1815年のあいだで、ドイツ国民の神聖ローマ帝国の版図全域で平和が保たれた期間は70年もなかった」（*Germany*, Bd. 2., S. 233）ともいわれる。なかでも最大の規模で最も激しく戦われたのが三十年戦争である。とりわけ戦場となったドイツは、この戦争によって壊滅的な被害をこうむった。三十年戦争による人口減少は、一般に都市では33%、防備施設の貧弱な農村では40%と見積もられている。もちろん人口減少の程度は地域によって大きく異なっている。戦争の被害をまったくあるいは少ししか受けなかった北西ドイツの諸地域は、その人口水準を維持したのにたいし、マルク・ブランデンブルク、ザクセン、バイエルンの人口は半減した。メクレンブルク、ポンメルン、ヘッセン、プファルツ、ヴェルテンベルク（表5）における人口喪失の割合は、三分の二あるいはそれ以上にのぼった。ベーメン（ボヘミア）の人口も、1618年の170万人から1654年の93万人に減少した。南ドイツ最大の都市として1600年には4万5000人の人口を擁したアウクスブルクではあるが、1635年のセンサスによれば同市の人口は1万6000人にすぎなかった。南ドイツの他の都市と地域における人口減少をみると、ニュルンベルク50%、ミュンヘン60%、カウフボイレ（Kaufbeuren）75%と推計されている。ドイツに隣接するフランシュ・コンテも、1635~1644年の戦争による荒廃のために、その人口の半分から四分之三を失った。他方、ハンブルク、ブレーメン、リューベックなどの北ドイツのハンザ諸都市は、基本的にその人口水準を維持するか、あるいは増加させた。例えばハンブルクの人口は、1620年の約4万5000ないし5万4000人から1660年の7万5000人へと増大した。ドイツ全体としての人口は、三十年戦争のために1600~1700万人から1000~1100万人に減少した。

### 飢饉

「数世紀間というもの、飢饉はまことに執拗に再来して、人類の生物学的制度に組み込まれていたほどで、その日常生活の構造の一環をなしていた。物価高と品薄とは、じつにヨーロッパにおいてさえ——ここは有利な地歩を得た地域であったのに——連続的に襲いかかってくる、見慣

れた敵手であった。栄養のよすぎる金持ちが何人かいたところで、通則にはなんら変わるところがなかった。事態が変わるわけもなかった。穀物の収穫率は貧弱であった。二年続けて凶作だと、破局がひき起こされたのである」(ブローデル『物質文明・経済・資本主義』I-1、81ページ)。

近世のヨーロッパをくりかえし襲った凶作は、凶作 → 飢饉 → 疫病という因果関係を通じて人口危機をひき起こした。この時代の収穫量は年によって大幅に変動し、凶作が二年ないし三年連続して起こったときには、穀物の供給は危機的な水準にまで低下し、種用の穀物にすら事欠くことになった。当然のことながらまず穀物価格が高騰し、それに他の食料品の価格上昇が続いた。そうすると、とりわけ貧しい人々は必要最低限の食料すら買うことができず、飢餓に瀕することになった。また一般に当時の交通と輸送は、ある地域での余剰を他の窮乏地域へ時間的に間に合うように輸送できるほど機動性に富んでいなかったし、実際にそのようなことを行うには大変なコストがかかったので、被害を緩和する現実的な手段たりえなかった。特に関税障壁によってある地方が別の地方と分断されていた状況下では、二つの隣接する地域の一方が餓死に直面しているのに、他方は十分な食糧を供給されている、といったようなことが起こりえた。

農作物の作柄は、当時は今日以上に気候と天候によって左右された——翻弄されたといっても、過言でないだろう。近世はいわゆる「小氷河期」(Kleine Eiszeit)と時期的に重なっており、1550年から1850年には寒い冬と雨の多い夏が多かった。16世紀の前半は全般的に気候に恵まれていた。ときには暑い夏があり、冬はかなり寒く異常に乾燥していたけれども、農作物の収穫には好ましい天候が続いた。だが16世紀半ば以降、厳寒の冬と多雨の冷夏が多くなり、豊作をもたらす前提条件が失われた。17世紀初頭は一時的に比較的暖かく乾燥した夏に恵まれたが、早くも1620年頃には遅い春の到来と雨がちの寒い夏と秋を特徴とする時期が始まった。1635年頃から17世紀末までは乾燥した年が続いた。1685年以降は、今日まで経験したうちでも最悪の気候——冬も夏も寒く、それに加えて夏と秋は雨の多い気候——の時期となった。それゆえ、ヨーロッパ全域を襲った最もひどい飢饉の一つがまさにこの時期(1695年)に起こっているのは、決して不思議ではない。18世紀初頭は収穫を増加させる比較的温暖な天候に恵まれたが、1730年頃から大陸型気候(寒く乾燥した冬が終わると、涼しい春と暖かい多雨の夏がやってきて、そのあとには冬のような秋が続く)の時期が始まり、それは19世紀初めまで続いた。18世紀は17世紀に比べて良い天候に恵まれてはいたが、それでもやはり異常気象が原因となって農作物が全滅あるいは減収し、食糧の供給不足が発生した(*Germany*, Bd. 2, S. 8)。

食糧不足と死亡率とのつながりは、1590年代、1661年、1690年代の危機から判断して、確かな証拠によって裏づけられるように思われる。1594~7年はヨーロッパの大部分の地域で大雨と不

作の年で、そのために穀物価格は急騰した。スペイン、イタリア、そして特にドイツでは、この災害は、ペストの流行によってもたらされた大量死と時を同じくしていた。1659~62年の危機は、多くの国で絶対王政への道を容易にする条件を生み出した。フランスの北部と東部における1661年の凶作は、若きルイ16世が自分を情け深い支配者として彼の臣民に印象づける機会をつくりだした。1692~4年に西ヨーロッパは不作に見舞われた。1693年11月には——アlicant市の報告によれば——「14カ月も雨が降らなかったために、収穫はないも同然であった。」フランスにとって1693年は17世紀最悪の年であった。パリ北東にあるムラン (Meulan) では、穀物の価格は三倍になり、埋葬は平年のそのほぼ二倍半になった。三十年戦争中の1637年にフランシュ・コンテを襲った飢饉について、ある同時代人はこう記録している。「後世の人たちは信じないだろうが、人々は庭や畑の草木を食べて生きていた。死んだ動物の腐肉を探し求めさえした。……そしてついには人肉を食べるまでにいたった。」フランスでは1693~4年に——疫病の発生と相俟って——死者の数は200万人を超えた。三年後の1696年には、悲惨な凶作がフィンランドを襲い、1696~7年に同国の人口のおそらく四分の一を奪い去った (Kamen, *European Society*, S. 37-38)。

宗教改革からフランス革命の時代までに、幾度となく飢饉に襲われた時期があったけれども、最後の大きな飢饉による災害の一つは、1770年から72年にかけてのことであった。1770年と1771年に大雨のためにベーメンの穀物収穫が大きな被害を受けたとき、住民の14%にあたる25万人が死亡したといわれる。ザクセンも、ちょうど同じ年に不作に見舞われた。1767~1770年の年平均出生数と年平均死亡数を、1771~1773年のそれらと比較してみると、1771年と1772年には出生数が約6万多く、1772年と1773年には出生数が3万6000少なかったため、結果として人口が6%純減したことがわかる (Blum, *The End of the Old Order in Rural Europe*, S. 147)。そしてこのときの飢饉をきっかけの一つとして、それ以後ヨーロッパにジャガイモの栽培が普及していったといわれている。

だが、凶作が実際にどのような被害をもたらすかは、地域の産業構造のあり方によって少なからぬ違いがみられた。表6は、17世紀末フランスのボーヴェ地方の三つの教区における埋葬数と結婚数と妊娠数の変動を、そして表7は、この時期の小麦価格の動きを示したものである。小麦価格が高騰したときには死亡率が激増し、結婚数と妊娠数の双方が激減するという一般的傾向がはっきりと認められる。しかしながら、注目すべきことに、これら三つの教区における被害の程度は同じではない。オヌーユは他の二つよりも軽傷ですんだ。このような違いが生まれた理由は、これらの教区の経済構造が異なっていたことに求められる。オヌーユの属する地域は、牧畜が農業全体のなかで重要な位置を占める混合農業地帯であり、このことが凶作による穀物収量減少の

被害を緩和するのに役立つ。これにたいして、ブルトゥーユが位置するピカルディの高原は基本的に穀物単作地帯であり、凶作の影響を和らげるクッションの役割を果たすものがなきに等しかった。しかし、この凶作によって最も甚大な被害を受けたのは、農村工業で生計を立てている労働者たちであった。大規模な地方的毛織物工業が立地していたムゥイにおける驚くべき死亡率が、そのことを如実に物語っている。穀物価格が高いときには生産の重心が工業部門から農業部門へ移動し、そのため毛織物工業で働く労働者たちは、貨幣を最も必要とするまさにそのときに失業させられたのである。

### 疫病

「不作も一回ならまだよい。二回となると、物価が狂騰し、飢饉が御輿を据える。しかも決して飢饉だけではすまない。遅速の差はあるが、それは疫病の露払いを務める」(ブローデル『物質文明・経済・資本主義』I-1、89ページ)。

ヨーロッパの全域を襲った大規模な疫病としては、本稿が扱う時代以前の出来事ではあるが、14世紀におけるペスト(死体に見られる紫斑や膿胞の黒さゆえに「黒死病」とも呼ばれる)の大流行がある。1347年、すでにコンスタンチノーブルをはじめ、キプロス、サルディニア、コルシカ、マジヨリカ等の地中海の主要都市、さらにマルセイユ、ヴェネチア等の港町に上陸していた黒死病は、1348年に入ると、1月にアヴィニオンに伝播したのを皮切りに、4月にはフィレンツェ、8月にはイングランドまで上陸し、翌1349年の11月にはスウェーデンやポーランドに広がり、1351年にはロシアにまで達した。ジョヴァンニ・ボッカッチョ(1313~75年)は、『デカメロン』(柏熊生訳)のなかで、フィレンツェへのペストの到来とその病状について記したあと、同市とその周辺農村の惨状を次のように伝えている。

そうして棺をかついだのは、身分のある市民ではなく、こうした仕事を金をもらってやっていた死体運び(ベッキーノ)と呼ばれていた細民の出である一種の死体運搬埋葬人でございました。で、かれらは、死者が生前に手配しておいた教会などほうっておいて、大抵の場合は一番手近の教会に、……棺を運んでいきました。聖職者たちは先に述べた死体運びの助けをかりて、……儀式で骨を折るようなことはしないで、ふさがっていない墓穴ならなんでも構わず見つかり次第、死体をそのなかに埋めました。……

……あらゆる教会に、毎日、ほとんど毎時間、すでにお話したような夥しい数の死体が続々と運ばれたものですから、これを埋葬するには、墓地が十分ではありませんでした。……どこもかしこも全部いっぱいでしたので、教会の墓地に大きな溝をつくり、そ

のなかへ新たに運ばれる死人が何百となくおさめられました。死人はそのなかに、まるで船に貨物を積み込むように、一段一段と溝の頂きに達するまで積み重ねられ、土をかぶせるのもやっとならざるに過ぎませんでした。

……そこ〔田舎〕では、散在している部落や畑地でね、哀れな貧しい働き手やかれらの家族の者が、医者や僧侶の面倒も煩わさず、あるいはまた召使いの世話も受けなくて、道端や、耕作地や、家のなかで、昼夜をわかつたず、人間というよりも、まるで畜生のように死んでいきました。そんなわけでかれらは、市民と同様、その習慣のうえで、放埒に流れ、自分たちのことや仕事は何一つかまいませんでした。それどころか、皆はまるで死が自分たちのところに訪れる日を待ってでもいるように、家畜や土地や、さては自分たちの過去の労働などの未来の収穫をあげるために手をかすどころか、現在手許にあるものを使い果たそうとあらゆる知恵をしぼって努力しておりました。

……3月と同年7月のあいだに、……きっとフィレンツェの城壁内では10万人以上の人間が生命を奪われたらろうと考えられるほど、天の残虐と、それから一部には人間の残虐がひどいものであったという以外に、もっとなんとお話しすることができるでしょうか。

当時のヨーロッパの総人口8000万人のうち、その約三分の一にあたる2500万人が、この1348~51年のペスト流行の犠牲者となった。だが、ペストによる悲劇はこれで終わったわけではなかった。このときの大流行をきっかけとして、ペストはいわば風土病化してヨーロッパの地に根を下ろし、それ以後18世紀にいたるまで何度もくりかえし発生した。とりわけ17世紀にはヨーロッパの各地で頻発し、死亡率を通常の何倍にも高めた。「アムステルダムでは、1622年から1628年にかけて、ペストが毎年続いた（決算——死者3万5000人）。パリでは、1612年、1619年、1631年、1638年、1662年、1668年（最後の流行）にペストが流行した。……ロンドンでは、1593年から1664年—65年にかけて、ペストが5回くり返して襲いかかり、合計すると15万6463人の犠牲者が出たという」（ブローデル『物質文明・経済・資本主義』I-1、102ページ）。三十年戦争中の出来事であるが、ネルトリンゲン（Nördlingen）市は1634年のペストでその9000の人口の三分の一を失った。18世紀に入るとペストは勢いを弱め、1720年にマルセイユで猖獗をきわめた（同市の人口の半分が犠牲者となったといわれる）のを最後にヨーロッパ本土からは姿を消し、1743年のメキシコでのペスト流行が西ヨーロッパで最後のものとなった。しかし東ヨーロッパではそれは依然として猛威をふるい続け、モスクワでは1770年のペスト流行で多数の死者が出た。

当時ペストから身を守るためにとられたごく普通の方策は隔離であった。1563年にイングラン

ドでペストが流行していたあいだ、宮廷はウインザーに移され、同時代の年代記編者が報じているところによれば、「ロンドンからそこにやって来た者がいたら、かれらすべてを吊し首にするために市の開かれる広場に絞首台が立てられた」(Kamen, *European Society*, S. 34)。ペストは貿易路にそって広がり、行軍する軍隊によって運ばれたが、隔離はかなり効果があった。陸路を通じて伝播する疫病を防ぐのは困難であったけれども、海路による通商の禁止はいつも成功をおさめた。例えば、この方法によってオランダは1563年のイングランドでのペストから、スペインは1720年のマルセーユでのペストから救われた。

ペストは確かに恐ろしい病気ではあったが、しかしそれは多くの病気のなかの一つにすぎず、ほかにも——長期間をとってみればペストよりも頻発し、それゆえより大勢の人々の命を奪った——ペストに劣らず恐ろしい伝染性の病気がたくさんあった。すなわち、ジフテリア、コレラ、チフス、天然痘、猩紅熱、インフルエンザ等々である。一般的にいて、疫病が発生すると、罹患した者の三分の一から半分が数カ月のあいだにその犠牲となって命を落とした。「1775年のある医学書は、種痘がようやく話題になりかけていたころのことだが、天然痘を《すべての病気のうちでもっとも一般的なもの》だとしている。100人中、罹患者は95人。罹患者7人につき1人が死亡、とある」(ブローデル『物質文明・経済・資本主義』I-1、89ページ)。ジェンナー(1749~1823年)によって牛痘の効果が明らかにされたのは1798年以後のことであるから、1775年当時「話題になりかけていた」種痘は、牛痘種を使った種痘法ではなく、それ以前に行われていた人痘接種法である(18世紀の種痘論争については、ヴォルテール『哲学書簡』第11信「種痘について」を参照)。

疫病の社会的影響についての研究はまだ不十分にしかなされていないが、社会諸階層が平等に疫病の犠牲になったのではないことは疑いようがない。疫病は不潔な状態のところにはびこり、なによりもまず都市の下層階級を襲った。ロンドンでは——死亡者統計表(Mortality Bill)が示すところによれば——疫病は最も貧しい郊外から発生した。そしてこのような現実、死のままでの社会的不平等という現象をひき起こす重要な原因の一つであった。自分たちの目に映るありのままの事実をみて、上層階級の人々は、疫病を広く伝染させるのは貧民たちだと感じていた。他方で貧民たちは、物質的な快適さに恵まれた連中は疫病の襲来からも免れるという事実を不快に思っていた。貧困と栄養不良は、疫病の犠牲者の二大特徴であった。こうした貧困と疫病の結びつきに鑑みて、公共団体は都市の衛生状態の改善に力を入れたけれども、都市当局によって講じられたなんらかの措置が実際に功を奏したかどうかは疑わしい。

### Ⅲ 人口変動の歴史的趨勢

まず、1500~1900年の期間におけるヨーロッパ主要諸国とヨーロッパ全体の人口変動を世紀単位で示すと、表8のようになる。ヨーロッパ全体としてみると、人口はこの間一貫して増え続け、特にヨーロッパで本格的な工業化が始まった19世紀における人口増加が際立っているが、19世紀の問題は本稿の考察範囲の外にある。16世紀と18世紀はどの国にとっても——したがって、ヨーロッパ全体としても——人口増加の世紀であった。これにたいし17世紀には、人口は——イギリスとロシアを例外として（増加率はともに29%）——停滞もしくは減少した。ドイツの人口減少はすでに見た三十年戦争によるものであり、スペインのその原因は1596~1602年と1647~52年におけるペストの流行であった。イタリアでも、17世紀の20年代と30年代における疫病の流行によって人口が減少した（ただし、これには相当の地域差があり、南部はほとんど被害を受けなかったのにたいして、北部は深刻な人口危機に見舞われ、1650年の北イタリアの住民数は百年前より10%も少なかった）。

以下では、これまで述べたことを補足しながら、近世ヨーロッパにおける人口変動の歴史的趨勢を世紀ごとに見ていく。

#### 16世紀

ヨーロッパの人口は15世紀後半から増加を開始し、増加は16世紀を通じて続いた。1450年を基準として計算すると、西ヨーロッパの人口指数は1450年=100、1500年=155、1600年=195となる。この数値は、16世紀に入ると人口増加の速度が15世紀後半よりも落ちたことを示している。14世紀の半ばから後半と15世紀初めに頻発したペスト流行による人口減少が埋め合わされたあと、人口増加のテンポが減速したのである。

16世紀にはヨーロッパ全域で人口増加が起こったけれども、その増加率は地域によってかなり違っていた。表9が示しているように、北欧と北西欧においては著しい人口増加が見られた（1500年から1600年にかけて指数は北欧では100から163、北西欧では100から154に上昇）。ホルント州の人口増加は特に著しかった（1500年を100とすると1650年は328、北ネーデルラント全体では197）。これにたいして、西欧と南欧と中欧における人口増加率は相対的に低かった（これらの地域では1500年から1600年に人口指数は100からそれぞれ105、132、130に上昇）。こうした人口増加率の地域差は、この時期に経済・政治・文化の中心が地中海地域から大西洋に面した北欧と

北西欧へと移動しつつあったことの反映とみなすことができる。この16世紀の人口増加は、世紀の後半に——特に1570年代初めの飢饉以後——減速した。

ドイツの人口は、14世紀のペスト大流行によって、1340年から1470年にかけて1400万人から1000万人に減少した。しかもその後、ドイツでは農民戦争によっておよそ10万人の生命が奪われた。しかし、ドイツの人口は16世紀に急速に増加し、1560年には1340年の水準（1400万人）にまで回復し、1620年には1600万人に達した（Engelsing, *Sozial-und Wirtschaftsgeschichte*, S. 58 u. 91; Schulze, *Deutsche Geschichte im 16. Jahrhundert*, S. 23 f.）。

### 17世紀

17世紀に入ると、人口増加の速度は概して緩やかになり、表10の人口増加指数が示しているように、特に中欧と西欧と南欧で目立って停滞的になった。そして戦争と飢饉と疫病のために、ヨーロッパの各地で異常な人口減少が生じた。特に三十年戦争の主要舞台となったドイツにおいては、既述のように、容易に回復することのできない破局的な人口喪失が生じた。

ポーランドとマソヴィアの人口は、1655～60年のスウェーデン・ポーランド戦争のために、1655年の383万人から1660年の250万人に減った。イタリアの人口は、1600年から1650年にかけて1330万人から1150万人に減少したが、その後増加して1700年までに1340万人になった（要するに、17世紀を通じてほとんど増加しなかった）。スペインの人口は、1587～92年の768万人から1646～50年の525万人に減ったが、1712～17年には700万人にまで回復した。フランスは当時のヨーロッパで最大の人口を擁していたが、同国の人口は——20%以内の幅での変動を含みながらも——比較的安定していた（17世紀半ばの人口数はおよそ2300万人）。

これにたいして北欧と北西欧の人口は、ペースを落としながらも増加を続けた。17世紀前半の増加率は比較的高く、停滞が起こったのは後半においてであった。例えば、イングランドとウェールズの人口指数は、1603年から1670年に100から141に上昇したが、その後の増加は微々たるものであった（1731年に144）。北ネーデルラントでも同じような傾向が観察され、1600年を100とすると、1650年と1700年の人口指数はそれぞれ125と126となる。

17世紀における人口の停滞と減少には多数の要因がかかわっていた。戦争と疫病と飢饉が主要な原因であったことは確かであるが、それ以外の無視できない要因として結婚年齢の上昇があった。17世紀の人口動態は、経済状態の全般的悪化をもたらした16世紀の過度な人口増加にたいする反作用であったが、この厳しい経済的状況に適応するために当時の人々は結婚を遅らせることによって——マルサスの用語を用いれば、「予防的制限」(preventive check)を通じて——かれ

らの生殖パターンを変えたのである。表11から明らかなように、17世紀、特にその後半には女性の結婚年齢はヨーロッパの多くの地域で上がり、その結果として当然のことながら婚姻内出生力は低下した。

17世紀のヨーロッパにおける人口の動きは一般に停滞ないし減少によって特徴づけられるが、このような全般的な趨勢とは大いに異なり、急激な人口増加を経験した農村地域があった。それは、とりわけ繊維工業を中心とする農村工業が集中的に展開した地域である。この「プロト工業化」(Proto-Industrialisierung)が起こった地域では、農村家内工業の発展によって恒常的な就業機会が創りだされたので、これまで結果的に晩婚を余儀なくさせていた結婚と相続との結びつきが断ち切られると同時に、相続に与らない若い男女も奉公人として余所に働きに出るの必要がなくなり、自分が生まれた故郷で結婚して生活することが可能になった。しかも家内工業経営は、むしろ結婚と家族の形成を前提としていた。というのは、家内工業においては妻や子供の労働が不可欠であったからである。こうして農村家内工業が展開した地域では結婚年齢が低下し、その結果は人口増加であった(これについては、後述参照)。

## 18世紀

中世後期の危機のあとに16世紀の好況と拡大局面が続いたように、17世紀の危機は18世紀の長期の成長にとって代われ、この成長は停滞と危機に終わることなくそのまま「離陸」へと移行した。ヨーロッパの大部分の地域では1740年頃からいわゆる近代以前型の人口動態構造が消滅し、人口は再び急増しはじめた。そして本格的な工業化をともなったこの人口増加は、19世紀末に低出生率と低死亡率を特徴とする新しい均衡システムが形成されるまで続いた。他方、16世紀と17世紀に観察されたあの人口増加の地域差、すなわち、中欧と西欧と南欧の人口増加率に比して、北欧と北西欧のそれが高いという現象は、18世紀においても依然として継続していた(表12)。こうしてヨーロッパの経済・政治・文化の重心は、16世紀から18世紀のあいだに、地中海地方の諸国を離れて、大西洋岸に面した国々へと移動していったのである。

ドイツは三十年戦争による人口喪失から徐々に回復しつつあったが、1700年頃にはその喪失はまだ完全には埋め合わされていなかった。例えば、ヴェルテンベルクの人口が1614年以前の水準に回復したのは1730年代であった(表5)。クールヘッセンについても同様のことがいえる。ドイツ全体の人口数は、1720~1750年に三十年戦争以前の水準(1500~1700万人)に回復したのち、18世紀半ばから持続的な増加が始まり、同世紀末までに2300~2400万人に達した(表13)。また西ドイツ諸領邦の人口増加は比較的緩慢であったのにたいして、エルベ川以東のそれは急速であっ

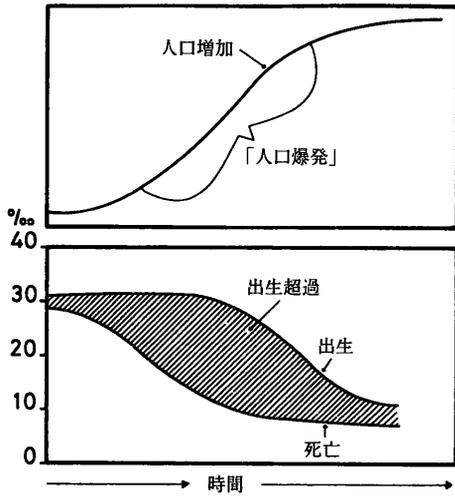
た。プロイセンの中核諸州（西ドイツのプロイセン領を除く）の人口指数は、1748年から1800年にかけて100から161に上昇した。

1700年を100として、他のヨーロッパ諸国の1800年の人口指数を表せば、次のようになる。フランス=134、イタリア=135、北ネーデルラント=111、南ネーデルラント=194、イングランドとウェールズ=157。イングランドとウェールズを例にとってみると、表14に示されているように、ここでも人口増加率は1740年頃から上昇するが、それは死亡率の低下と出生率の上昇の両者によるものであった（表15）。

すでに述べたように、ペストは1720年のマルセーユでの大流行を最後にヨーロッパから姿を消した。また深刻な飢饉はあまり起こらなくなった。といっても、完全に消滅したわけではなかった。1771～72年には特に中欧において激しい食糧危機が発生し、例えばクールヘッセンでは死亡率が二倍になった。このときは死亡数が出生数を大きく上回ったという。しかしそのような人口危機は、もはや人口変動の全体的趨勢を決定するものではなかった。18世紀になると死亡率は確実に低下したのであり、特に世紀後半はそうであった。こうして平均寿命が伸びていった。

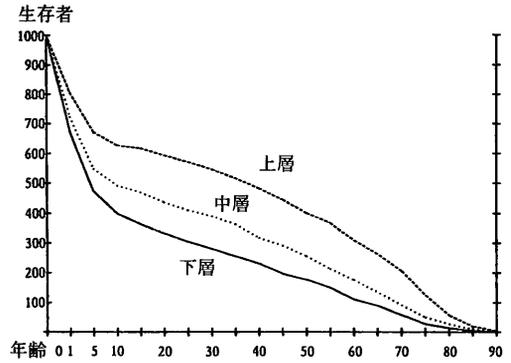
しかしながら、18世紀の人口増加を死亡率の低下だけで説明することは片手落ちであろう。もう一つの重要な要因として結婚年齢の低下があった。表11から明らかなように、女性の平均結婚年齢は18世紀に概して下がった。とりわけプロト工業化が進展した農村地域では、結婚と相続との結合——それは通常は結果的に晩婚を意味した——を要とする人口制御システムがはたらかなくなつたために、結婚年齢の低下とそれともなう急激な人口増加が起こった。1792～93年にヨハン・ヴォルフ（Johann Wolf）は、その『アイヒスフェルト政治史』（*Politische Geschichte des Eichsfeldes*）のなかで次のように述べている。「まさに機織りや糸紡ぎで生計を立てることのできるチャンスが与えられたことによって、以前には農耕ときわめて有用な手工業〔を営む者〕に限られていた結婚が、異常に容易になり、農村には人間が満ち溢れるようになった」（Kriedte, *Spätfeudalismus*, S. 130）。表16は、旧ヨーロッパ社会に備わっていた人口制御システムが作動しなくなったプロト工業化地域と伝統的な農村における人口増加の顕著な相違を示す一例である。

図1 人口転換の図式



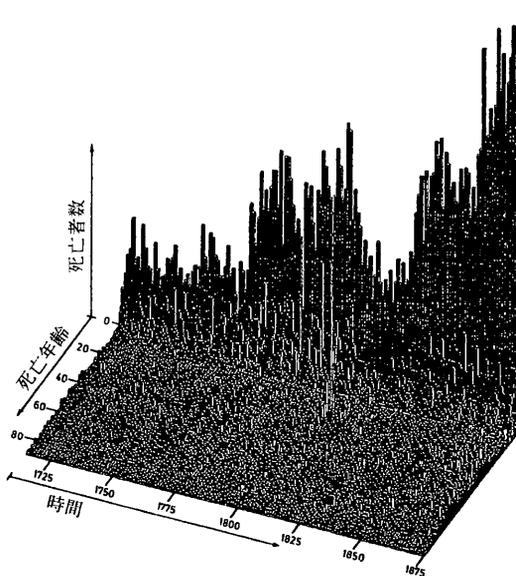
(出典) 人口転換の図式: Imhof (1977), 61

図2 ジュネーヴの階層別余命 (1625~1684年)



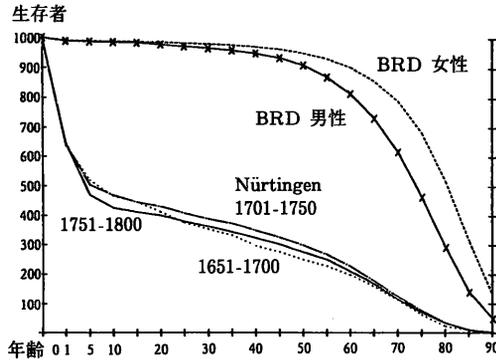
(出典) ジュネーヴの階層別余命 (1625~1684年):  
Borscheid (1989), 248

図3 ドロテーンシュタット教区の年齢別死亡者数 (1715~1875年)



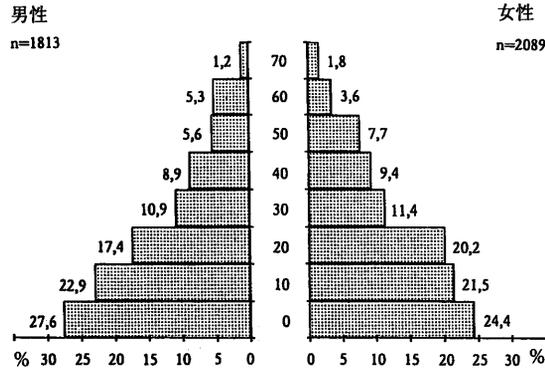
(出典) ドロテーンシュタット教区の年齢別死亡者数 (1715~1875年):  
Imhof (1985), 204

図 4 近世（ニュルティンゲン）と現代（ドイツ）の死亡パターン



(出典) 近世（ニュルティンゲン）と現代（ドイツ）の死亡パターン：  
Borscheid (1989), 257

図 5 チューリヒ市とその郊外の年齢別人口構成（1637年）



(出典) チューリヒ市とその郊外の年齢別人口構成（1637年）：  
Borscheid (1989), 25

表1 ドイツとオーストリアの平均余命 (年)

満年齢	ドイツ				オーストリア			
	1871/80年		1967/69年		1865/75年		1971年	
	男	女	男	女	男	女	男	女
0歳	35.6	38.5	67.4	73.5	30.4	33.1	66.6	73.7
5歳	49.4	51.0	64.5	70.3	45.3	46.5	63.9	70.6
30歳	31.4	33.1	40.9	46.0	29.7	30.5	40.5	46.3
60歳	12.1	12.7	15.1	18.8	11.8	11.7	15.2	19.1
80歳	4.1	4.2	5.3	6.0	4.1	3.9	5.2	6.1

(出典) ドイツとオーストリアの平均余命: ミッテラウアー/ジーダー (1993) 152

表2 イギリスとオッフエンブルクの乳幼児死亡率 (%)

	イギリス				オッフエンブルク	
	乳児死亡率 1歳未満		幼児死亡率 1~9歳		乳児死亡率 1歳未満	
	男	女	男	女		
1550~1599年	143	127	142	123	1751~1760年	265
1600~1649年	162	123	127	118	1761~1770年	322
1650~1699年	170	133	137	147	1771~1780年	337
1700~1749年	195	148	143	139	1781~1790年	328
1750~1799年	165	152	133	117	1791~1800年	441

(出典) イギリスとオッフエンブルクの乳幼児死亡率:  
ラスレット (1986) 152; An Introduction to the Sources, Vol 1, 196

表3 ドイツとオーストリアの年齢別人口構成 (%)

年齢集団	Abtenau		Zell/Ziller	オーストリア			ドイツ			
	1632年	1671年	1779年	1900年	1951年	1970年	1871年	1900年	1950年	1970年
0~15歳	37.3	34.0	31.3	29.7	22.9	24.4	34.3	34.8	23.3	23.2
15~60歳	57.1	59.1	60.1	60.8	61.4	55.2	61.0	60.3	68.2	63.6
60歳以上	5.5	6.9	9.4	9.4	15.6	20.4	4.6	4.9	9.4	13.2

(出典) ドイツとオーストリアの年齢別人口構成: ミッテラウアー/ジーダー (1993) 154

表 4 イギリスとドイツにおける平均初婚年齢（歳）

イギリス			ドイツ		
時期	男性	女性	時期	男性	女性
1600～1649年	28.1	25.6			
1650～1674年	28.1	26.2			
1675～1699年	27.7	26.6			
1700～1724年	27.6	26.9	1700～1749年	27.8	25.3
1725～1749年	27.4	25.7			
1750～1774年	26.5	25.3	1750～1799年	28.0	25.7
1775～1799年	26.1	24.7			

（出典）イギリスとドイツにおける平均初婚年齢：Ehmer（1991），292

表 5 ヴェルテンベルク公国の人口（千人）

年代	人口数	年代	人口数
1598年	414	1679年	265
1622年	445	1697年	284
1623年	458	1707年	347
1634年	415	1730年	425
1639年	97	1750年	467
1645年	121	1754年	477
1652年	166	1759年	479
1669年	218	1769年	476
1673年	252	1794年	614

（出典）ヴェルテンベルク公国の人口：  
An Introduction to the Sources, Vol 1, 192

表 6 17世紀末ボーヴェ地方の人口危機

教区	四半期	1692年		1693年				1694年				1695年			
		3	4	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
オヌーユ	妊娠数	13	10	12	6	7	3	6	7	4	12	11	18	10	9
	埋葬数	6	5	6	7	17	17	16	36	23	22	10	9	5	2
	結婚数	3	3	0	1	2	1	0	0	0	1	1	4	5	2
ブルトゥーユ	妊娠数	14	9	18	10	4	8	12	12	5	24	22	26	14	19
	埋葬数	21	16	16	11	15	31	22	60	120	27	18	11	8	12
	結婚数	3	9	4	3	1	4	5	0	2	4	12	7	3	7
ムウイ	妊娠数	18	28	12	13	10	8	9	12	7	25	29	22	19	26
	埋葬数	12	18	29	14	37	67	124	82	35	21	20	17	15	17
	結婚数	5	1	4	4	0	5	1	2	3	8	6	5	14	8

（出典）17世紀末ボーヴェ地方の人口危機：リグレイ（1982）74

表7 17世紀末の小麦価格

(1ミン [=約78ℓ] につき1スー)

年代 (10月に始まる収穫年)	価格
1690~1691年	35
1691~1692年	54
1692~1693年	94
1693~1694年	150
1694~1695年	57
1695~1696年	34

(出典) 17世紀末の小麦価格：リグレイ (1982) 76

表8 近世ヨーロッパ主要諸国 (1914年以前の国境) の人口 (百万人)

	フランス		イギリス		ドイツ		イタリア		スペイン		ロシア		ヨーロッパ全体	
	人数	増加率	人数	増加率	人数	増加率	人数	増加率	人数	増加率	人数	増加率	人数	増加率
1500年	16		4		12		10		8		9		80	
1600年	19	19%	7	75%	16	33%	13	30%	10	25%	14	56%	105	31%
1700年	20	5%	9	29%	15	-6%	13	0%	9	-10%	18	29%	115	10%
1800年	27	35%	11	22%	24	60%	18	38%	12	33%	26	44%	185	61%
1900年	41	52%	37	236%	51	113%	34	89%	19	58%	59	127%	400	116%

(出典) 近世ヨーロッパ主要諸国の人口：Our Forgotten Past (1982), 110

表9 近世ヨーロッパの人口変動 (千人)

	1500年		1600年		1700年		1800年	
	絶対数	指標	絶対数	指標	絶対数	指標	絶対数	指標
北 欧	1,600	100	2,600	163	3,100	197	5,000	313
北西欧	6,300	100	9,700	154	12,700	202	21,200	337
西 欧	17,000	100	17,900	105	20,800	122	27,900	164
南 欧	16,400	100	21,700	132	21,700	132	31,300	191
中 欧	18,500	100	24,000	130	24,500	132	33,500	181
小計	59,800	100	75,900	127	82,800	138	118,900	199
東 欧	12,000	100	15,000	125	20,000	167	36,000	300
南東欧	9,100	100	11,200	123	12,200	134	20,800	229
小計	21,100	100	26,200	124	32,200	153	56,800	269
合計	80,900	100	102,100	126	115,000	142	175,700	217

(注) 北 欧=デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド  
 北西欧=ブリテン諸島、オランダ、ベルギー、  
 西 欧=フランス  
 南 欧=ポルトガル、スペイン、イタリア  
 中 欧=ドイツ、スイス、オーストリア、ポーランド、チェコ  
 東 欧=ロシア (ヨーロッパ部分)  
 南東欧=スロヴァキア、ハンガリー、ルーマニア、バルカン諸国  
 (以上それぞれ現在の国境)

(出典) 近世ヨーロッパの人口変動：Kriedte (1980), 12

表10 17世紀ヨーロッパの人口指数

地域	1600年	1700年
北欧、北西欧	100	128
中欧、西欧、南欧	100	105
全体	100	109

(出典) 17世紀ヨーロッパの人口指数：  
Kriedte (1980), 80

表11 16～18世紀ヨーロッパにおける女性の結婚年齢の変化(歳)

	1550/99年	1600/49年	1650/49年	1700/49年	1750/99年
コリトン (Colyton)	27.0	27.1	29.4	28.3	26.3
ボッツフォード (Bottesford)	—	25.7	26.4	27.5	26.5
シェップシェッド (Shepshed)	—		28.1	27.4	24.1
ムラン (Meulan)	—	—		24.9	25.5
ホイヘルハイム (Heuchelheim)	—	—	24.1	25.8	23.8
ギーセン (Giesen)	—	25.4	24.3	24.3	—
ジュネーヴのブルジョワ	21.4	24.6	25.7	26.3	24.0
イギリスの貴族	22.8	23.4	23.6	24.6	25.0

(出典) 16～18世紀ヨーロッパにおける女性の結婚年齢の変化： Kriedte (1980), 82

表12 18世紀ヨーロッパの人口指数

地域	1700年	1800年
北欧、北西欧	100	166
中欧、西欧、南欧	100	138
全体	100	144

(出典) 18世紀ヨーロッパの人口指数：  
Kriedte (1980), 128

表13 17~18世紀ドイツ (1871年の国境) の人口変動 (百万人)

	Clark <sup>a)</sup>	Cipolla/ Borchardt <sup>b)</sup>	Abel <sup>c)</sup>	Wehler <sup>d)</sup>	Bosl/ Weis <sup>e)</sup>	Sagara <sup>f)</sup>	Kellen- benz <sup>g)</sup>	Dipper
1600年	15	15	16 (1620年)	15	16	18	18-20	18-20
1650年	12	—	10	—	10	10-11	11-13	11-13
1700年	15.5	15	—	16	—	—	—	15-17
1750年	18	—	18 (1740年)	16-18	18	18	18-20	18-20
1800年	23	24.5	—	23-24	23 (1815年)	—	24	23

- a) C. Clark, Population Growth and Land Use, London 1969, 64.  
 b) Europäische Wirtschaftsgeschichte, Hg. C. M. Cipolla u. K. Borchardt, Bd. 2, Stuttgart 1978, 20; Bd. 3. ebd. 1976, 16.  
 c) W. Abel, Geschichte der deutschen Landwirtschaft, Bd. 3, Stuttgart 1967, 275.  
 d) H.-U. Wehler, Deutsche Gesellschaftsgeschichte, Bd. 1, München 1987, 69.  
 e) K. Bosl, E. Weis, Die Gesellschaft in Deutschlands, Bd. 1, München 1976, 221 f.  
 f) E. Sagara, A Social History of Germany 1648-1918, London 1977, 10.  
 g) H. Kellenbenz, Deutsche Wirtschaftsgeschichte, Bd. 1, München 1977, 305.

(出典) 17~18世紀ドイツの人口変動 : Dipper (1991), 44

表14 イングランドとウェールズの人口増加率 (%/10年)

期間	増加率	期間	増加率
1570~1600年	5.6	1731~1741年	-0.3
1600~1630年	5.6	1741~1751年	3.6
1630~1670年	0.8	1751~1761年	7.0
1670~1700年	1.5	1761~1771年	7.3
1701~1711年	2.7	1771~1781年	6.8
1711~1721年	0.3	1781~1791年	9.5
1721~1731年	-0.9	1791~1801年	11.0

(出典) イングランドとウェールズの人口増加率 :  
 An Introduction to the Sources, Vol 1, 117

表15 イングランドとウェールズの地域別平均出生率と平均死亡率（％）

地域	1701～1750年		1751～1780年		1781～1800年	
	出生率	死亡率	出生率	死亡率	出生率	死亡率
北西部	33.6	28.0	39.6	26.7	39.8	27.0
北部	32.6	28.5	35.1	26.8	35.1	25.3
南部	32.8	30.6	36.6	29.0	37.1	26.0
ロンドン地区	38.0	48.8	38.5	43.3	37.9	35.1
イングランドとウェールズ	33.8	32.8	37.2	30.4	37.5	27.7

(出典) イングランドとウェールズの出生率と死亡率：  
An Introduction to the Sources, Vol 1, 118

表16 ノッティンガムシャーの農業村と工業村の一村あたり平均人口数

村落類型	個数	1674年		1743年		1764年		1801年	
		絶対数	指数	絶対数	指数	絶対数	指数	絶対数	指数
農業村落	62	166	100	187	113	199	119	279	176
工業村落	40	230	100	340	148	462	210	908	395

(出典) ノッティンガムシャーの農業村と工業村の一村あたり平均人口数：Kriedte (1980), 83

参考文献

- Blum, Jerome, *The End of the Old Order in Rural Europe* (1978)
- Borscheid, Peter, *Geschichte des Alters* (1989)
- Braudel, Fernand : ブローデル『物質文明・経済・資本主義』I-1 (『日常性の構造』1) みす  
ず書房 (1985)
- Chuanu, Pierre, *Europäische Kultur im Zeitalter des Barock* (1989)
- Cipolla, Carlo Maria : チポラ『経済発展と世界人口』ミネルヴァ書房 (1972)  
—, *Before the Industrial Revolution*, 2nd edition (1983)
- Dipper, Christof, *Deutsche Geschichte 1648-1789* (1991)
- Dülmen, Richard van, *Entstehung des frühneuzeitlichen Europa 1550-1648* (1982)
- Ehmer, Josef, *Heiratsverhalten, Sozialstruktur, ökonomischer Wandel* (1991)
- Engelsing, Rolf, *Sozial- und Wirtschaftsgeschichte Deutschlands* (1973)
- The Fontana Economic History of Europe*, Vol. 2: The Sixteenth and Seventeenth Centuries,  
Hg. Carlo M. Cipolla (1974)
- Germany: A New Social and Economic History*, Volume 2: 1630-1800, Hg. Sheilagh Ogilvie  
(1996)
- Gillis, John R. : ギリス『〈若者〉の社会史』新曜社 (1985)
- Gottlieb, Beatrice, *The Family in the Western World* (1993)
- Goubert, Pierre : グベール『歴史人口学序説』岩波書店 (1992)  
—, *Louis XIV and Twenty Million Frenchmen* (1970)
- Henning, Friedrich-Wilhelm : ヘニング『ドイツ社会経済史——工業化以前のドイツ』学文社  
(1998)
- Imhof, Arthur E., *Einführung in die Historische Demographie* (1977)  
—, *Die verlorenen Welten*, 2. Aufl. (1985); English translation = *Lost Worlds* (1996)
- An Introduction to the Sources of European Economic History 1500-1800*, Vol. 1: Western  
Europe, Hg. Charles Wilson & Geoffrey Parker (1977)
- Kamen, Henry, *European Society 1500-1700* (1984)
- Kriedte, Peter, *Spätfeudalismus und Handelskapitel* (1980)
- Laslett, Peter : ラスレット『われら失いし世界』三嶺書房 (1986)

Mackenroth, Gerhard : マッケンロート『人口論』中央大学出版部 (1985)

Mitterauer, Michael u. Reinhard Sieder : ミッテラウアー／ジューダー『ヨーロッパ家族社会史』  
名古屋大学出版局 (1993)

*Our Forgotten Past: Seven Centuries of Life on the Land*, Hg. Jerome Blum (1982)

Pfister, Christian, *Bevölkerungsgeschichte und Historische Demographie 1500-1800* (1994)

Polanyi, Karl : ポラニー『大転換——市場社会の形成と崩壊』東洋経済新報社

Schulze, Winfried, *Deutsche Geschichte im 16. Jahrhundert* (1987)

Wrigley, E. A. : リグレイ『人口と歴史』筑摩書房 (1982)

斉藤修編著『家族と人口の歴史社会学』リプロポート (1988)

坂井栄八郎『ゲートとその時代』朝日新聞社 (1996)

高澤紀恵『主権国家体制の成立』山川出版社 (1997)

速水融『歴史人口学の世界』岩波書店 (1997)